

【学位論文審査の要旨】

本研究は、妊娠・出産する女性と助産師との関係が、どのように成り立っているのかを、助産ケア実践場面のビデオを用いた参与観察と助産師へのインタビューを組み合わせたフィールドワークによって得られた成果である。研究参加者は、病院1施設と助産所3施設において、計8名の助産師とそのケアを受けた11名の女性であった。助産ケアは、女性と助産師の関係が深く関わっているが、彼らにとってあまりにも日常的なものであるため、はっきり意識されたり、言語化されたりすることが難しい。本論文では、この言語化が難しい関係の探究のために、現象学とその影響を受けたエスノメソドロジの思想が手がかりとされた。

結果では、女性と助産師との関係が、“女性の”、あるいは“助産師の”と明確に区別できず、両者にとって互いの経験が組み込まれて成り立っていることが示された。また助産師にとって女性との関係は、互いに働きかけ合い、応答し合う相互行為によって成り立ち、互いを自他として区別する以前の状態において経験されていた。考察では、自他が区別されない状態において〈共に〉支える、どちらのものと位置づけられない経験と、区切りを含み、区切りをこえて〈持続〉する経験が、現象学の記述を引用しつつ説得的に論じられた。

審査会において、本申請論文は次の点が評価された。

第1に、目的に沿って丁寧に記述された助産師の語りと女性との相互行為のあり方にはリアリティがあり、その解釈も概ね理解できる内容であった。とりわけ、互いの経験を含み込む関係の成り立ちが、助産師と女性とのやり取りという実践そのものから浮かび上がってきていた点は、本申請論文の新規性と独創性として認められた。この関係は、既存の概念や捉え方とは異なる見方、考え方を与えるものであり、看護学の実践、教育、研究へ寄与するものと評価された。

第2に、助産師と女性の関わりの分析において、現象学とエスノメソドロジーが活用可能であることを示した点に研究の意義があると評価された。本申請論文において、これらの思想および方法が選択された理由は根拠をもって論じられており、研究プロセスにおいても結果においても十全に活かされ、今後の研究への貢献も期待できる。

第3に、考察において、メルロ=ポンティとハイデガーの現象学、およびそれらに基づいたベナー／ルーベルの現象学的人間観が参照され、助産師と女性との「〈共に〉ある」あり方が、自己と他人が未分化な匿名的なあり方に基づけられていると論じた点、さらには、自他の明確な区別がなく〈共に〉ありながら、助産師としての「私」が際立ってくることを指摘した考察が、高く評価された。これらは哲学としての現象学に対しても寄与しうる視点であり、考察のさらなる発展が期待された。

審査会では、助産師と女性との関係の成り立ちを解明する目的としながら女性へのインタビューがされていない理由、時間や空間を区別されていないとしながら病院や

助産所という場所の区別をしている理由、助産学への貢献における先行研究の理解、助産師と女性との関係を「共にある」とした意味、本研究の理論的基盤となった現象学とエスノメソドロジーを用いた理由、考察における「関心」「円環的な構造」「誰のものでもない」などの表現の確認、本研究の限界と課題、看護学の実践、教育、研究への貢献等について質疑応答が為された。加えて、助産学への意義についての記述の適切性について課題があることが確認された。申請者は、これらについて概ね妥当な回答をしており、今後の課題についても、真摯に受け止められていた。公聴会においても、実践への貢献、施設の選択、調査の組み立てなどについて質問が為され、申請者は概ね妥当な回答をしていた。

以上より、申請者の研究は博士論文として妥当な水準に至っており、申請者は博士(看護学)の学位に相当する学識と研究能力を有していると判断した。